

## 小児の健康増進に関するシステム設計の基礎研究（第三報）

分担研究者 田 中 恒 男（東京大学医学部保健管理学教室）  
研究協力者 西 垣 克（ ” ）  
菅 田 勝 也（ ” ）  
南 悳（ ” ）

はじめに

子どもの健全な発達・発育を支持するサブ・システムはきわめて多様であるが、それらのサブ・システムは未だ統合された体系を作っていない。個別の問題の発生ごとに特定のサブ・システムが独自に機能し、他のサブ・システムとの有機的関連がないまま機能を終る仕組みは、わが国の保健・医療制度にあって全ての面でいえるところであるが、子どもをめぐる各種の養護体制に係る条件はさらに多様である。そのため、子どもの健全な発達・発育をめぐる支援サービスの矛盾は、他の事項よりさらにいちぢるしい。

子どもの全人間的な健康を支持するためには、保健・医療システムの完備はもとより、地域社会において子どもをとりまくあらゆる要素が整備される必要があり、その中でも「子育ての論理」と価値意識、地域社会での子どもを見る目の確立が必要である。健康増進システムの中では、ややもすると体力づくりと栄養が先行し、そのための施設づくりや給食などが施策化されているが、果してそういうハード・ウェアの充実止まってよいものかにはなほ疑問が残るところである。ことに近年、社会問題となっている自閉児等の情緒障害児の増加と関連して、子どもの遊びの喪失という現象が多く識者に指摘されており、遊びの場面での環境への働きかけや他者との相互作用の持つ意味を充分考慮した上で、子どもの遊びを支援する必要がある。

われわれは過去3年間、子どもの行動分析を通じて、子どもの発育・発達にかかわる多くの要素の抽出を試み、その上で健康増進への結びつきを考

案すべく努力してきたが、今回の調査を通じ、改めて、受け皿となるべき地域社会の体制の建て直しの必要を認めたので報告する。

### 研究方法と対象地域

先に示した本研究の目的から、地域社会の中での子どもの生活像を把握し、彼らをとり囲む諸条件とくに育児環境の影響を明らかにすることが必要不可欠となる。この中でも、子どもに対する周辺の価値観（子育ての論理）の影響を分析している例は極めて少ない。そこでわれわれは、前年度まで「子どもの生活の実態を参加観察法に準じて調査し、その結果について、文化圏の影響を比較考察する」とし、青森県、埼玉県、高知県の三農村地域において現地調査を実施し、検討した。

今年度もこれまでと同様に、観察対象とした6歳未満の幼児6人（表1）の居住する地域の特性やそれぞれの家庭を中心とした生活環境や育児環境の把握を行なったのち、対象児の日常生活行動を場面見本法で観察記録した。ただし、前年度までの行動上の問題点に関する分析結果をふまえて、行動をより詳細に記録するため、観察間隔を1/3の5分とした。また上記6人とは別に9人を選び、登園時から始業までの自由時間（約1時間）に、行動の連続時間的観察もあわせて行なった。

調査対象地域の埼玉県秩父郡東秩父村は、県の北西部に位置し秩父山系の平野部の東南部に面した山村である。村の中央部を槻川とその支流が流れ、古くは和紙や養蚕を生業の中心とした。今日では、隣接する小川町や寄居町への通勤兼業が主な生業となっている。村内には2診療所と1歯科

診療所があり、日常的な受療はほとんど村内の医療施設に依存している。小川町には公的病院があり、近郊都市部の病院も利用されている。児童施設としては、4保育園(白石,太内沢,安戸,城山)があり、また17児童公園と杜寺の境内を含めて整地された広場は約30ヶ所ある。観察対象児6人の居住する坂本地区は、槻川とそれに並行する県道をはさむ比較的傾斜のゆるやかなV字谷であり、平地面積は非常に少ない。家々の間隔は、川上に向かうにつれて畑や草地をはさんで離れており、また斜面のかなり高い所まで家が点在している。

### 結果と考察

前年度までに、子どもの生活行動には、その地域の生活文化や生育環境が非常に大きな影響を及ぼしていること、また子どもの行動ならびに精神的発達面において無視しえない問題が潜在していることが明らかとなった。そしてこのような側面に関しては、単に医療施設整備を行えばよいというものではなく、日常生活条件、ことに保育にかかわる諸条件を整備しなければ健康増進は成り立たないことを確認した。行動面では特に、保育園という集団保育システムのもつ影響力は大変大きい。ここから外れた場合、たとえ近隣に遊び友達となる可能性のある子どもがいても、ほとんど接触をもたない者が少なからず認められた。そこで今年度は、集団保育システムからはなれた時の子どもの行動の展開のしくみを調べるため、特に「遊び」に焦点をあて分析を進めることにした。

該村では、4～5歳児はほとんどが保育園に通っており、保育の指導のもとで一定のスケジュールに従って行動しているため、彼らが本当に自主的に遊びを展開できるのは帰宅後の数時間である。対象児の家庭での遊び友達と、屋外での遊び場について、養育者に対する面接結果を表2に示す。A,Eは近所に同年代の子どもがいない。表3は、対象児の帰宅後2時間余りの間の他者との接触割合を示している。おとなとの接触は約30%で、該村は直系三世代家族が多く、養育者としての祖母の役割も大きい。他の子どもとの接触状況をみると、A,Eのように近所に適当な遊び相手を見出せない者は、同胞以外との接触がほとんどない。この年齢層では遊び友達を求めて遠くまで出かける

ことは困難である。B,Cはそれぞれ3～4人の子どもとの接触があったが、常時一貫した遊び仲間はいなかった。D,Fは集団遊びへの参加があった。子どもの遊び集団の形態には、タテ型とヨコ型の2つがあるが、タテ型集団とは、年長児と年少児がひとつの集団に属しリーダーに率られている集団をいい、構成人数が比較的多い。ヨコ型集団とは、年齢差のない構成員の集団でありせいぜい2～3人である。D,Fの属する集団の構成は図2のとおりで、タテ型集団である。彼らはすべて家が近接している。調査日の一日について、この集団の時間的経過をみると以下のとおりであった。4時50分にD子が帰宅し、F夫が遊びに来る。5時に兄のP夫が帰宅。次いでQ子が遊びに来る。P夫が主導して庭に出、そこにR子,S夫,O子が来る。庭では10分程、ブランコの支え棒にぶらさがったり、へいに上ったり、庭石の上に絵を描いたり、メンバーそれぞれ独自の行動をとってはいるが、それぞれの間では会話がある。そこでP夫が「いつもの川に行って遊ぼう。」と提案、全員そろって行く。女兒は橋を渡り対岸から川原に降り、互いに背負いながら水際に行く。男児は砂場で遊び、女兒は皆ひさまで水につかって遊び、集団は2つに分かれている。そのうち兩岸から男児と女兒が水をかけあってふさけるようになり、集団がひとつになる。日が暮れてQ子の母が迎えに来たところで解散が始まる。この観察において集団のリーダーはP夫であった。P夫は遊び方や昆虫などについての知識が豊富で、遊びについての提案はほとんど彼がしていた。リーダーを除くと他に役割分担は認められなかった。保育園で同級生のF夫とR子は園内でもよく一緒に遊び、他の仲間と4～5人で固まって遊びの相談をしている場面をよくみかけた。しかしD子とS夫は園内では彼らとあまり行動を共にせず、家庭での遊び仲間と保育園での遊び仲間は必ずしも一致しない。

このような仲間集団の形成にかかわる要因としては、本人が集団遊びが可能なら成長していること他に、環境、家族を含めた人的交流、養育者の態度などがあげられる。仲間集団をつくっていた2人と他の4人を比較すると、D,Fは年齢的に十分集団遊びが可能であり、近所は比較的家屋が多く年齢差のあまりない子どもが多いので、

年長児が遊びを主導してくれ、遊びの内容が多様である。親達も同じような年齢層で家族同志の交流も多い。また、背後に山、前方に川というように遊び場としての自然環境に変化がある。

以上述べてきたように、遊び仲間は遊び行動にかかわる重要因子となるものであるが、保育園での自由時間で9人の観察結果もこれを裏づけている。図4は遊びの構成人数と遊びの継続時間との関係をみたものである。構成人数が2~3人のときはひとり遊びのときとほとんど差がないが、4人以上になると継続時間が長い方にシフトしている。遊びに対する集中度が大きいほど、また、組織的遊びになるほど継続時間は長くなるものであり、遊び仲間が遊び形成と行動の社会化の両面で大きな意味をもつことがわかる。また、図5から、年齢が高いほど遊びの継続時間が長いことがわかるが、これと関連して、図6からは、年齢が高いほど構成人数が多い遊びをすることもわかる。ここで構成人数6人以上の場合、4歳児の方が時間的割合が大きい。表4をみると、4歳児は他の子どもとのかかわりが薄い「並行的遊び」が多く、社会的参加の質が異なっている。パーテンは遊び場面で観察される子どもの行動を、「何もしていない行動、傍観者の行動、独立した遊び、並行的遊び、連合的遊び、協同的遊び」に分類している。この分類は子どもの社会的参加と発達水準をよく示すものであり、上に述べた現象を解釈することができる。また、9人の行動の変化の様子の一部を図7に示すが、i子のように5歳になっているのにあまり他の子どもと遊ばなく、傍観者の行動の多い子どもは注意を向ける必要があらう。

遊び場に関しては、よく遊ぶ場所として、山・川・畑などの自然環境は全員があげ、また、それぞれの家には広い庭があり、自宅の庭を6人中4人があげている。一方地区内に2ヶ所ある児童公園をあげたものは1人しかいない。この地区のように、都市のような過密による遊び環境の悪化のないところでは、福祉施設を都市的に設営してもそこで遊ぶ子どもはほとんどいない。そのような人工的に造られた場所よりも、自然の中、雑然とした場所の方が彼らの興味をそそり、新しい発見やそれに対する挑戦という基本的欲求に訴えるこ

とがわかる。

近年、子どもの遊び空間、遊び時間、遊び仲間の縮少という問題が、農村部においても表面化しているが、その原因は、都市における過密化による遊び場環境の悪化や教育過熱などとは異なっている。現在、農村においては、子ども数の減少により、適当な遊び集団を形成することが難しいという現状がある一方で、旧来の農村社会においておとな同志にも子ども同志にも存在した人間と人間の間「みずな」のうすれに問題の本質があるように思われる。

#### まとめ

近年の医学やマスコミの進歩は、子どもの疾病や障害についての知識を増加させ、それに対するサーピスも飛躍的に向上した。確かにこれは、彼らの健康問題の解決において第一義的なものである。しかしながら一方で、われわれは、子どもたちの成長発達を考える上で、同程度に重要な事柄を知らなすぎるのではなからうか。それは彼らをとりにまく周囲の世界(自然,社会,文化的環境)と、その中で彼らがどのような状況におかれ生活しているのか、またそれらの相互作用はどうかなど、ダイナミックな行動的側面である。異なる地域、異なった生育環境におかれた子どもたちは、おのずとそれぞれ異なった生活像をもち、その中から生じてくる問題も異なる。われわれは子どもたちの生活像をさらに充分に知らなければならぬし、より詳細な観察にもとづいた、子どもの行動に即した施策をたてていく必要があらう。

すなわち、子どもの健康を確立し、さらに増進させるためには、本研究班の他分野で検討されている各種のサブ・システムの整合性を計るとともに、健全な人格育成のために、子どもの生活への指導体制をとる必要があり、それは個々の地域文化に応じた内容でシステム化されるべきであると考えるに至った。ただいたずらに中央指導の下で施設をつくっても、それ以前の子どもの生活のあり様の是正と、その行動を受けとめる社会の価値体系が、子どもの健全な育成に志向されたものでなければ何の意味ももたないことを改めて強調したい。

図 1 東秩父村概略図

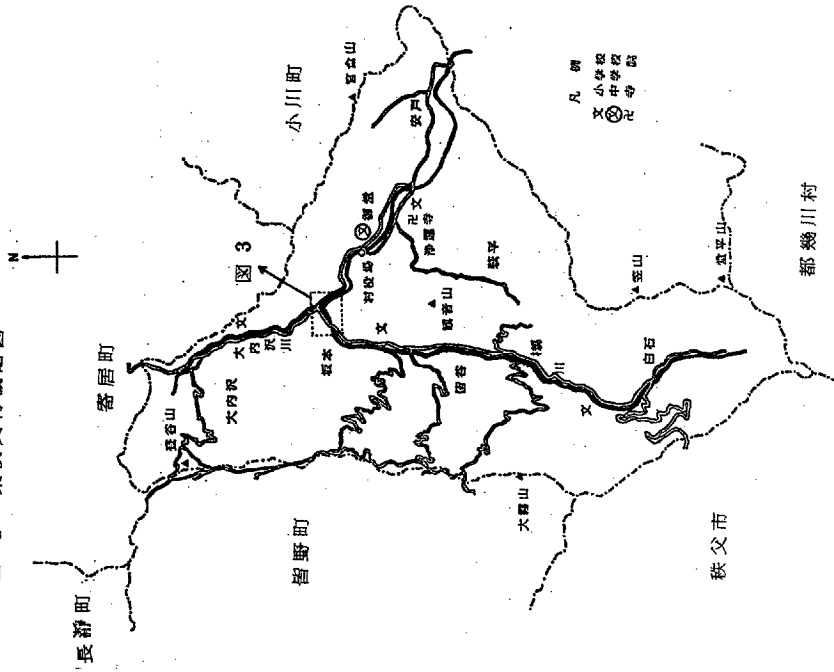


表 1 観察児の概況

対象	年齢	性別	家族構成	部屋数 (畳)	主育児 担当者	観察日	天候
A	4才9ヶ月	女	祖父 農業 弟2才9ヶ月 祖母 々 父 会社員 母 教員	6部屋 (42)	祖母	7月 24日 火	晴れ
B	4才4ヶ月	男	祖父 母主婦 祖父 弟2才 祖母 父 鉄工所自営	5部屋 (42)	母	7月 28日 土	小雨 のち 晴れ
C	4才5ヶ月	女	祖父 農業 妹3才 祖母 々 父 会社員 母 パート務	5部屋 (36.5)	祖母	7月 28日 土	小雨 のち 晴れ
D	5才6ヶ月	女	祖父 会社員 兄6才 祖母 父 木工所 母 主婦	8部屋 (52.5)	母	7月 24日 火	晴れ
E	5才1ヶ月	男	祖父 会社員 兄6才 祖母 父 職人 母 パート務	5部屋 (30)	祖母	7月 26日 木	晴れ
F	5才8ヶ月	男	祖父 姉8才 祖母 弟7ヶ月 父 郵便局 母 主婦	9部屋 (50.5)	母	7月 26日 木	晴れ

表 2 観察児の遊び場所の状況

観察児	自宅近隣にある遊び場所	よく遊ぶ場所	友人数
A	自宅の庭、校庭、川、畑、	自宅の庭、	—
B	自宅の庭、境内、空き地、原っぱ、	原っぱ、鉄工所の中	5~6人
C	自宅の庭、児童公園、友人宅、畑、	田畑、	2人
D	山、川、自宅の近所、友人宅、	橋近辺の道路、	5~6人
E	自宅の庭、校庭、川、		—
F	友人宅、川、自宅の近所、	川原、	6人

表 3 接触相手の割合

対象児	子 供				大 人						観 察 時点数
	兄弟	従兄	近子 所供	計	父親	母親	祖父	祖母	他人	計	
A	63	—	3	66	—	29	—	6	—	34	35
B	32	32	6	70	1	20	1	8	—	30	79
C	32	40	10	82	—	—	3	13	3	18	72
D	24	—	62	86	—	5	—	4	5	14	79
E	34	—	—	34	6	9	6	46	—	66	35
F	22	—	37	59	5	14	8	14	2	42	65
計	32	15	24	70	2	12	3	12	2	30	365

図 2 集団の構成

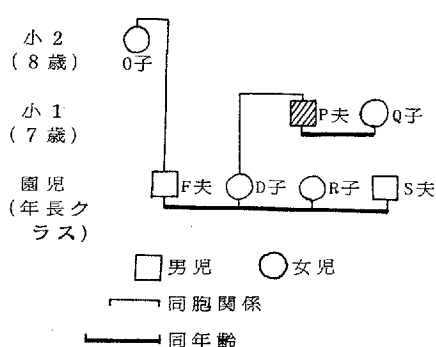
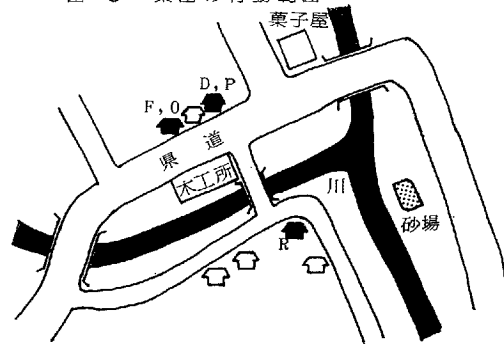


図 3 集団の行動範囲



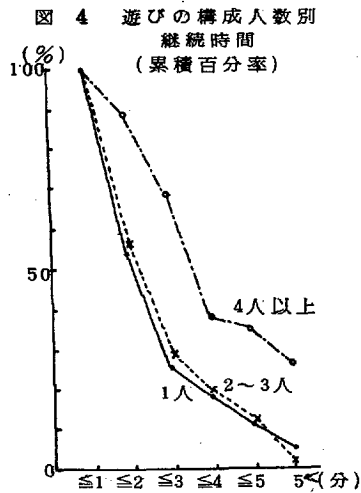


表 4 対人関係からみた遊びの分類  
(構成人数 2人以上の場合)

年齢	並行的 遊び	連合的 遊び	観察された 遊び回数
4歳児	64	36 %	116
5、6歳児	42	58	139

図 5 遊びの継続時間  
(回数割合)

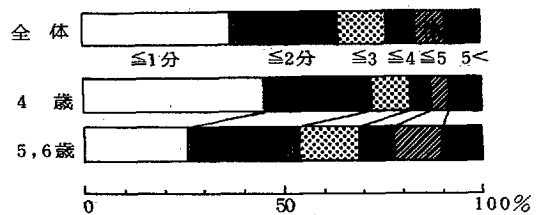


図 6 遊びの総時間に対する  
構成人数別時間割合

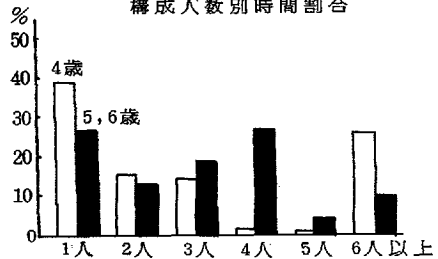
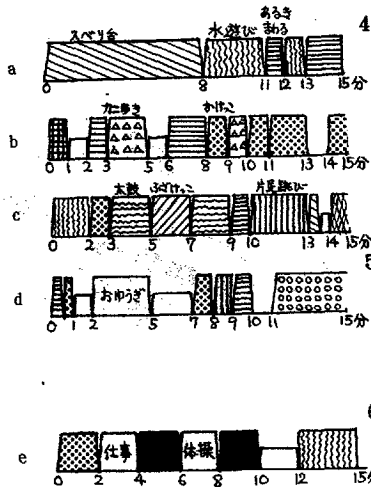
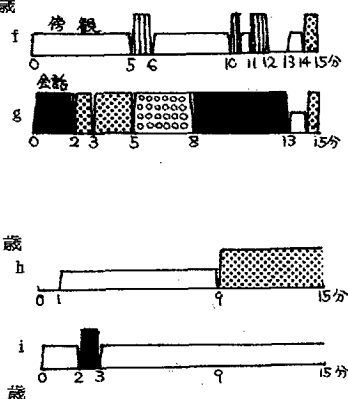


図 7 遊びの変化  
男児



女児





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

子どもの健全な発達・発育を支持するサブ・システムはきわめて多様であるが、それらのサブ・システムは未だ統合された体系を作っていない。

個別の問題の発生ごとに特定のサブ・システムが独自に機能し、他のサブ・システムとの有機的関連がないまま機能を終る仕組は、わが国の保健・医療制度にあって全ての面でいえるところであるが、子どもをめぐる各種の養護体制に係る条件はさらに多様である。そのため、子どもの健全な発達・発育をめぐる支援サービスの矛盾は、他の事項よりさらにいぢぢるしい。